



## 日本人の歴史観を背景に、クールヘッド・ウオームハートで 開発途上国の開発金融をデザインする

### 外国銀行のアジア進出は是か非か アジアのよき理解者として判断する

開発途上国の開発金融のデザイン——こうした分野の研究者は、最近、国内でも急速に増えてきています。それでも、一般には分かりづらい面があるかもしれません。

具体的なテーマとして、開発途上国への外国銀行の進出を考えてみましょう。外国銀行が地元銀行を買収して進出した場合、顧客層が変化をします。収益重視の行動で、これまでの顧客だった地元企業を切り捨てるのが、珍しくありません。開発途上国にとって、短期的には金融健全化や経営効率化につながりますが、長期的視野でみれば経済発展にいいのかどうかは判断が分かれるでしょう。

中欧諸国では、外国銀行のシェアは5割を超えています。ここはもともと社会主義国でしっかりした地場銀行がなかったことで、メリットの方が強いでしょう。ラテンアメリカにはスペイン系の金融機関が進出していますが、文化的には共通するものがありますから、地方に東京の銀行が進出してきたといったイメージでそう問題はないのかもしれません。

しかし、東南アジアの場合は、欧米とは文化的土壌が全く違います。北海道拓殖銀行のクラッシュが北海道経済に与えたような影響を、国家レベルで被る可能性があるのです。

アジアの金融危機の後、インドネシアの中央銀行で会った国際金融機関の欧米系のコンサルタントは、「インドネシアに地場銀行はなくてもよい」と主張していました。また、タイの中央銀行では、欧米系のコンサルタントへの不信と反発の声を多く聞きました。かれらの処方箋は現実にとどこまで妥当なものだったのか、また、これで本当にその国のためにいいのかと、アジア人としての感情に訴えてくるものがあります。

しかし、熱くなっているのは物事を冷静に判断できません。

「クールヘッド・ウオームハート」が重要なのです。そして、アジアにある先進国として、発展のよき理解者としてのスタンスが必要になります。

### アジアにはアジアのスタイルがある 華僑金融に見る制度補完の行動

日本人には歴史的にもものを見る意識があります。江戸時代からの経済発展の流れの中で、現状を捉えようとする姿勢が自然にできます。中国や韓国にも、こうした意識があるようです。ところが開発途上国には、経済発展をしてきたという認識がありません。また、一般にアジアの大学では経済史が重視されていません。そのせいか、歴史意識が希薄です。例えば、アメリカで金融を学ぶと、それをそのまま自国に導入しようとしてしまいます。日本だったら、過去の発展との整合性のようなものを考えつつ導入するでしょう。

歴史的な視点を持つということは、固有の文化と経験を踏まえるということです。

東南アジアの金融の基盤は華僑金融です。人的ネットワーク重視で意思決定を行うスタイルに特徴があります。近代的とは言い難いのですが、実情に沿った正しい決断を下せることも多いのです。欧米銀行のプレゼンスが低いのも、強固な華僑金融の存在があったからでしょう。これからの金融デザインも、この金融風土を踏まえて作らないといけません。

### 日本にはない文化的、社会的要素と 経済学の根本を組み合わせて考える

ゼミではまず、金融の基礎を身に付けてもらいます。それと同時にアジアの国を知ってもらいます。アジアの国といっても数多くありますから、各ゼミ生に1国を担当してもらっていま



す。例えば、フィリピン担当なら、経済から芸能、犯罪、社会現象まで、あらゆるものを調べてもらいます。もちろん、金融論の書籍や論文も読んでもらいます。アジアの発展と金融風土の中でものを考え、どんな政策が必要かを考えるのです。

金融活動はルールにのっとった行動ですから、その国の金融制度に制約されます。そこでまず、研究対象国の金融システムを知らなくてはなりません。とはいえ、制度によるルール化には限界がありますし、開発途上国では制度自体が未整備です。しかし、現実には金融が行われているわけですから、それを補うものがあるはず。経済分析にあたっては、そうした部分もうまく取り入れて分析しないと、実態と違った結果を導き出してしまいます。

例えば東南アジア有数のタイのバンコック銀行でも、その行動の背景には華僑金融が滲みでています。また、マレーシアの金融を考えるとときには、経済政策の根本にある民族問題も忘れてはなりません。マレーシアの金融制度は、華人とマレー系との民族対立を緩和する装置として形成されてきたからです。金融政策としては非合理かもしれませんが、経済政策トータルで見ればそれなりの合理性があるのです。

このように日本にはない文化的、社会的な要素と経済学の根本を組み合わせるわけ。現地の人も気がつかない日本人の視点から、金融デザインを提案していく。これは、かなり面白いですね。(談)

経済学研究科教授

## 奥田英信

Hidenobu Okuda

1956年生まれ。一橋大学経済学部卒業、ミネソタ大学大学院経済学研究科修了、経済学 Ph.D。  
日本輸出入銀行海外投資研究所研究員、  
一橋大学経済学部講師、助教を経て現在教授。  
専門・研究分野は開発金融論。  
これまでの研究地域：タイ、マレーシア、インドネシア、  
フィリピン、韓国、ブラジル、アルゼンチン。

